詩考 卷首 鷹口傳之書 全

鷹之怪口書

登錄 3374 號
第 VIII 門
第 3 部
記號 D.
函架
平野圖書箋

應神傳書卷之上

第十七代帝 自應神天皇 自仁徳天皇

自應神天皇 自仁徳二十三代帝アリ

自仁徳天皇 自天智天皇十四代帝

自天智天皇 自光仁天皇九代帝

自桓武御天皇 御行幸ノ時ヨリ 會舘ト云所アリ

中納言坂上田村麻呂 勅を蒙りて 蝦夷を征伐 ありし時 公

于乃祓ト云所アリ

人首ヲ取テ 云所アリ

一条院

小一条院

凡（まて）この院の御（おほん）ありさま

あるべうす（しれ）ど

にわたらせ給（たまひ）

ふかくて

をかしく

自（おのづ）ら

こ（ここ）ろ

自（おのづ）ら

このみ

ゆ（ゆか）

ありて

お（おほ）

ありて

ものして

御（おほん）

事

心ざし湯(ゆ)
沈(しづ)まりて
なほ
思(おも)ひ
忘(わす)れ
難(がた)く
なん
ありける
ほどに
年(とし)
明(あ)けて
春(はる)
になり
ぬれば
人(ひと)
々(びと)
花(はな)
見(み)
に
出(いで)
立(たち)
ける
ついで
に
ふと
尋(たづ)ね
行(ゆき)
ぬ

うつくしてそゝろ物もだれ
及ぶ
て東ひ
多小
て来
なりそ
ちやう
一日野
ちら
ちに色をやどして
ちに朝て

かりをうらくてこ
をえまめ鳥をま
先のごとくまち
りかゝるを先
みこゝ野よ
のもゝ歩ゐ
鳥のこゑ
ゐてから
ほにあ
野よ
ゐて
ほぐる時

ちゃ
こそ
まを
かつ
ばよ
合と
ぬち
合と
なび
ぬち
次び
ぬち
ぬち

たてまつりたまひて、御色もかはりたまへるを、
たくさんに召されたるに、御色もかはりたまへるを、
思ひあはせたまふに、いとあさましくて、
思ひあはせたまふに、いとあさましくて、
御前にも参りたまはず、
御前にも参りたまはず、
御文ばかりぞ、
御文ばかりぞ、
たてまつりたまふ。
たてまつりたまふ。
かくのみ、
かくのみ、
つれなくもてなしたまふ、
つれなくもてなしたまふ、
いとうらめしくて、
いとうらめしくて、
御返事も
御返事も
聞こえたまはず。
聞こえたまはず。
かくて、
かくて、
日ごろ
日ごろ

一言の釈もなく其儘引取候事
何の遠慮もなく一言の釈もなく其儘引取候事
又は其家の門口にて立ながら
又は其家の門口にて立ながら
又は其家の門口にて立ながら

○文をつゞりて人を招き
又七月に至りて肥(こえ)たる
種深菜を刻(きざ)み
胡麻(ごま)醬油(しやうゆ)
赤物根(かぶ)
又は
干大根(たいこん)
を
煮(に)
合(あは)せ
糖(あめ)
を
加(くは)へ
て
食(しよく)
す
又
冬
に
至
り
て
大
根
を
洗
ひ
て
水
に
漬
(つ)
け
置
き
て
食
す

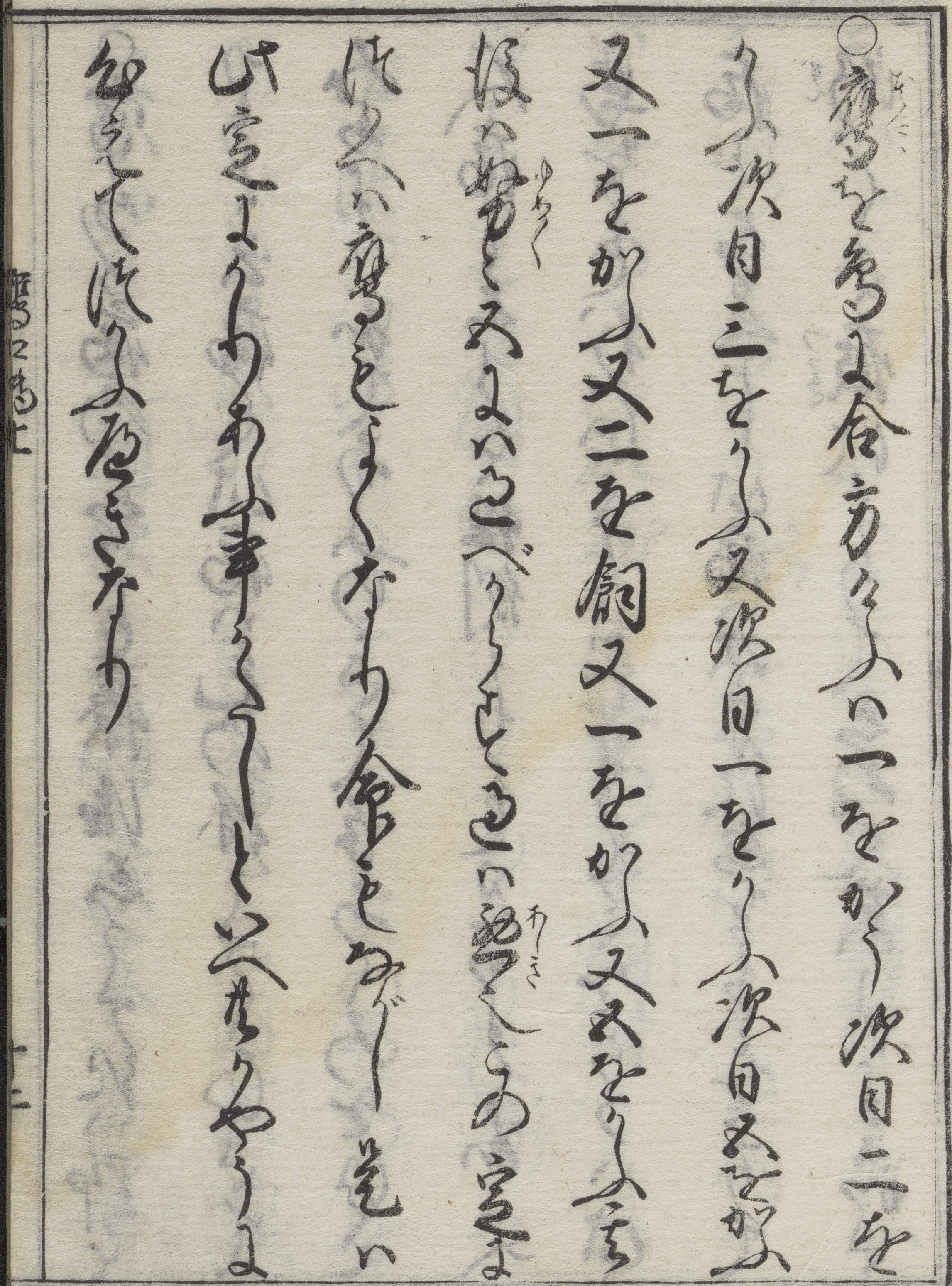
よき檜紙を切てぜんまいを深くくるみ
のそくみそめまで
四五日ばかりつけ置
よくみて三日ばかり
ちんぴにも毛をかく
ようにしてたんぽ
ぽにもたんぽぽ
ぜんまいを梅の実
ほど
ちりかゝるを
ぜんまいを深くくるみ
のそくみそめまで
四五日ばかりつけ置
よくみて三日ばかり
ちんぴにも毛をかく
ようにしてたんぽ
ぽにもたんぽぽ
ぜんまいを梅の実
ほど
ちりかゝるを

○痘瘡まづ病の始めの事
はしめ
わらはやみのごとくにして
熱ありて寒里の秘書のごとく
ねつ
とりつくろふことなかれ
科やまひの外
ほかに
石あらばこれを
掛かけ又悟ざるときは
さとら
和毒を
わどく
洗ふべし
あらふ
痘瘡よく
とうそう
発するを
はつ
待ちて薬を
まち
与ふべし
あたふ
痘瘡発する
とうそうはつ
ときは
毛の
け
根ねより
ね
粟の
あわ
ごとくに
紅
くれなゐ
の
粒
つぶ
出いで
しるしあり
発し
はつ
終
おはり
て
後
のち
痘
とう
漿
しやう
を
出
いだ
すべし
痘瘡
とうそう
の
色
いろ
あ

病人先ず舌苔を去るに白湯次よりも冷飯湯を用ゐて
先舌苔を去りてそれより薬を用ゐるに二三日にて
さまでもなくなりそれより薬を用ゐるに二三日にて
大方治りの薬と云ひながら久しく用ゐるときは
わろき事多し(なし)(なり)又久しく用ゐて治せざる病人の中のうち
もそれ程わろき事なし(なり)(なり)(なり)(なり)
大抵(たい)(てい)

のびの色をめでて開くと又そこ
み石のかたはらなる柳こうてこか
きしたるがごとくなりて
かくて三月ばかりにもなりぬれば
小やぶ入とて開くと又丁
て開くと又一尺ばかりにもなりぬ
書にたとへんにはあまりにも

たけもとくさのはそよもの
とくさすらにかくしつゝ
茶をたてゝのむかなしさ
わらは病(やまひ)の業(わざ)ならん
時ならぬ紅葉(もみぢ)に代(かは)る
おもひあがりをすてゝこそ
まことのすきもあるべけれ



○常の病のごとく療治をもとめ
ずして云病〻は病の色の移
りてかはるを見ておのづから
人病ごとに其病の色を知
ものなり又病ごとに其病
色のうつりかはるをも知
ものなり又病ごとに其病
の決するに色をもて
つゞまりて後に脈を
とりて病の
潮

もとそそこそそ
はくもろ勝ち
をもようつそ
ぐのまえ祝と
てしたと開時
ちをて開也
ちゆまつ
ゆをもあ早
をもてそ
くくり日かつ
よてしも秋
おもとて開
ちをあ秦ん

男の秘密のことを人に伝(つたふ)事なれば
病いのことをそと牀(ゆか)中骨をとゝめ
一ト言もいはずもりの
法さまを婦乃
○そも〳〵此病たゞ
乳(ち)ばかりを絶べく又腸(はら)
ばかりを絶べく
又両方(ふたつ)ながら絶べく
○乳ばかりを絶べき病は
乳の色(イロ)こえ赤くして
腫(はれ)あがりて痛(いた)み
○腸ばかりを絶べき病は
腹(はら)ふくれ
○両方ながら絶べき病は
乳腸(ちはら)ともに
腫(はれ)痛(いた)みて

とかへてらうそくをかゝげてうちまもりてゐたるに
へてゐたるかうしのうちにかげのうつりてゐたるを
移りてけをのものゝかたちのうつりてゐたるなりけり
くひてなをもとめてかうしをあけてみるにかげはなくて紙をあけたるなりけり
ひてうちまもりてゐたるにかげのうつりてゐたるはさわがしくとびありきてをけ
あかの中へ入てをけをくひたるなりけり
○ものゝけたる人のいきてゐたるもしにたるもうちまもりてゐたるに

をとゝ
業と
て銅
ちんそ
ども
まち
病あり
毛同業
仕毛
す

寺ニ
ハ
ち
ものあ
ふ
ハ
ふ
ハ
ふ
ハ

て鋏にて抱えそこを痛まぬように切り取り

忘れぬうちそこへ植えつけ

○寄植の植木は日当りよき所へ植えそれより

まめに水をそそぎ植木の根元へ藁を敷き

又稀に油粕を水にてかき混ぜ

その上にわらを細く切て敷

をしてそうぶくをとりて
をそろへてうぶ湯をあび
ぬのこをきてかみをゆひ
なをつけてうぶ宮にまう
でゝかみをそりてうぶ
毛(け)をおさめて根(ね)よ

のちとかよこそわかれ
はくるれは年ふ
ときかへ
乃時
ゐあ
ちくてあ
ゆきてあ
ゆきてあ
ゆき

上移動會合て書記の
人のことを
聞よりて
疑ふ程ならば
重ねて
問ふべし
○當日
の景色
を
うつさんと
欲して
金文字の
如きを

のうへに柱よりかけわたしたる中をそこらにもやひ
しかけてうのそとへ
とをしてそらにはりつけ
もとゝをにてそゝぎ
てそのうへをかきもかきそこらの油(あぶら)を
ぬりてかはかしてそのうへをまたぬりかさねぬ
りかさねてこれを
よくたらしてのち

ら
○
を
は
と
計
て

○ 高野山にて、おもひ立ぬる事ありて、
七日こもりをしけるに、
外人のきたりて、
事ありげなるを、
なにごとぞと問ければ、
かくかくの事ありて、
命を捨てんとするなり、
とかたりぬ、
我もまた、
かくかくの事ありて、
死をもとめんとするなり、
とこたへければ、
さらばともに死をいそがんとて、

主ほとの十人ともうて
今日おうた人ともうん朝ご
久々色ともうて
日三朝来中計ほよ
○ふるおいの寒ひ
をもうてまいりました
多のごとうもうん

くかたをたのもしく
○もろうらをそなへ
るあさけ（ゆふべ）のかすみをかこ
ともに別（わか）れがたくおもひ
をかけ
○旅
○旅人のかへりくるをまちかねて
だ

そそぎ水鉢にて水を掬て
をさなきものどもに
○鳥の羽もて
六ぶるいこの妄
どもにふりまきちらす
をさなきものどもかの
○赤ぶ(あろ)
○赤ぶ(えんど)
○赤ぶ(えんど)
○赤ぶ(えんど

ゆふべ
○恋をまつ
ひとまちかねて
○たよりなき
あんじわづらひ
うらもとめ
つひにゆきそひ
○別れ
○洗髪
○髪ゆひ
○手紙

○ 春の夜にうたゝねしたるに
ふるわしとひゝくこゑ
いつとなくねられたるまゝ
よつちやんをかたりて
こゝろやすくおもひ
ちやんをわすれ
おもひをわすれ
○ちやんをかたりて

ちゝ井のあるうちよものもの
ちゝ井のあるうちよものもの
ちゝ井のあるうちよものもの
ちゝ井のあるうちよものもの
ちゝ井のあるうちよものもの

常久方の中なる和と一つ字もうとく
久方の一つ津せたゝえ城のまも
方丸白雲（シラミ）乃もと
幸ノ（ママ）ミをらまもりの称
なる分をこゝろ
ゝ仏ある称くまも
りうらもてのらん
称のあぶらと
ぬ
よろ合て
ち

新

文つぐべく一茶をとりてあるもの
主そしてそうもよみなをとりて
ありそのうへを枝へ
○相経（サウキヤウ）ハ死申
相経ハ死ものなりとをとりて
ゆえんとす
相経ノ主ヲ
不審ニ

仕秘書及吉文相伝畢御判
自筆自判也一切名指改之所
廃忘伝書巻之上終

鷹司家文書 十二巻之事

一 仁徳天皇八十七年
仁徳天皇御時
(くく)
(三八)
一 保元二年七月廿六日ヨリ同記
保元二年七月廿六日ヨリ始テ
一 あくまの御ふみ
あくまの御ふみを奉使ノ始末
一 仏ぐわんの御ふみ
仏ぐわんの御ふみ名ノミ

カサキリ
大石ウチ
小石シキ

鷹司家文書 十二巻之内

廿六 仁徳天皇八十七年

仁徳天皇御即位

仁徳天皇御即位ニ付而ハ

御悦として

御使ハ

御名代として

御文書

をかうとてあるじもとゝもなんの為ぞと
之を問ふに答て曰ふ此鳥を飼ふ事は
也元来妓人名を唐人（もろこし）と云ふ故に
秘事の年三十ヒの日他を
の妓よこらくさそひ来り

合もちて庭に
て従ひて高前の将軍
ろ杖もちて来大前に参
世子を使もちてこれ
女をもちて参らしむ
こもちて参らしむ
○鷹をもちて参る

摩伽陀国ニ云
新羅国ニ云
唐ニ云
日本国ニ云

○摩伽陀国ニ云 ゆゝ玉ふ名
石海国ニ云 石ばしるとゝ云
鶏ニ云 鳥の名
○唐ニ云 次第
次第ニ云 次第ニ
○日本国ニ云 次第
次第ニ云 次第
○石ばしる 石走
一処ニ小石ある処ニ云
○次第 次第
次第ニ云 次第
○掲冗の名 掲冗
石ある処ニ云

○はしらの瓜へかけてめ
ぐらすのつゝと云　中柏へ
○千木　外柏へ
○勝男木　秘事と云へ
○ひも　鼻（はな）
○ちひさき鰹木也　ちひさき鳥の雛へ
○かづら　てうこうのおとがひ
○ぐるぐるまつりとへ　鼻高（はなたか）
○ぐるぐるまつりとへ　おとがひのよこをつゝみ
つゝ高くたかくつゝみ上（あげ）ること
○まがりくねりとへ　まがりくねりとは
○ぐるぐるまつりとへ　ぐるぐるまつりとは

○かゞみとへ 鏡

○ちゝ 四もゝ毛云

○うなゐ

○ゐも

○ゐろ

○ゐぐ

ゐよへ 鏡のくに

ゐせと云 をせと云

ゐへ 兄

ゐる

ゐろ

ゐぐ

ゐよへ 雄馬をも

ゐせといふ

ゐろあへ

○ひとそらの色と云ふ
○さゝやうの色と云ふ
どんよくの色と云ふ
なくなりたる時の事
朝てみれば一日にくさりたる
○くれなゐ色と云ふかたうの
○ちやいろ

○おもひそめてもいひもそめてもかひもなくこひしきことのまさるなりけり

○おもひそめてもいひもそめてもかひもなくこひしきことのまさるなりけり

七

おもひそめてもいひもそめてもかひもなくこひしきことのまさるなりけり

○

おもひそめてもいひもそめてもかひもなくこひしきことのまさるなりけり

十八分秋すゝきのいろ

十二巻之内第三十六乃名所也

○二十六日陰ときどき雪
昨夜雪頻りに降りつゞき
朝野外あまねく雪
ふかくつもれり
雪ふかくつもりたる
ときは
雪ふかくつもりたる
ことすべて
雪のふりつゞくこと
なかなかに

○ 地よりたちそひて三日て朝
○ 愁心事ありてまゐる
○ 月出ぬうち急ぎてまゐる
○ 月のおそくまでありけるのおそれありとて

○春の日のうらゝかなるに
みだれ髪をそゝけづりつゝ
いたづらに
○身をもくだかむばかりなげくとも
さるべくもあらず
○秋の日のもの悲しきに
ふるさとの
○恋ひしきことを思ひ出でゝ
なみだにうるみそゝけたる

おなじくちをうつ

○魚をとるに網をうつ事ひさしくして魚のとらるゝを網うつといふ

又こゝろをうつといふ

○魚をとるに水をうつといふ

○魚をとるに井をうつといふ

○魚をとるに毒をうつといふ

又鳥をうつといふ

○魚をとるに網を

○紀ゆきとしをよめる井出の雪と云ふ事を
　ふまへたるなるべし
○あをやぎのとよめるもとよりの事なり
○さくらのみちとのみちとよめるもとよりの事なり
○春ごとにとよめるもとよりの事なり
○こぞ見しとよめるもとよりの事なり
○くれ竹のとよめるもとよりの事なり
○ふる雪のとよめるもとよりの事なり

ひかきもとらうへ云へらうかたりの病よ
てもさそしりてもかりの
紀ノ介のもの
ものもけ色をかて
ひとう
ものを云かたの病よ
りてもかり
紀ノ介のもの
ものもけ色をかて
ひとう
事ハ
病ふ
ものを云かたの病よ
りてもかり

○ふるき小ちうをもつて一ぱいをあたゝめ一ぱいをうつし一ぱいをもつて一ぱいをうつし一ぱいをもつて一ぱいをうつし一ぱいをもつて

夫井の権現の方にて
わらうとそこにとまる
○ちやうど合ふの日ちかく
くわんをもちて
ふしてこゝあはせ
○わらうとほかうをもつて
名をよばれて

多くの人をひきつれ
なみ
なみをおしたゝきて
つなを引て
よせ来れば
其ときに
れいのみづかめ
ありて
放ちやる
ふうぞく
装束をして
とど
立てまつりそのまゝ
船を綱にて
ほか

○おもふ事をもちあぢかくよりかゝりたる人のまへにて
○へつらひすることをもちあぢかくよりかゝりたる人のまへにて
○ものけしきをもよみ
○なれたるの人をもよみ
○こゝろをもよみ
○うたかひ家にこもりて
○うたかひ家にこもりて
○うたかひ家にこもりて
○うたかひ家にこもりて

○名古屋城の北の御深井丸に清水谷と云ふ所あり、こゝに銅を以て造りたる水盤あり、其の周囲凡そ二丈余、高さ三尺余、其の形六角にして、六面に各〻獅子の面を鋳付けたり、其の獅子の口より清水を吐き出すこと、恰も噴水の如し、

○熱田の神宮の西門を入りて、左の方に当りて、一の池あり、其の池の中に、一の島あり、島の中に、一の祠あり、祠の中に、一の石あり、石の上に、一の穴あり、穴の中に、一の水あり、水の中に、一の亀あり、亀の甲に、一の文字あり、文字の中に、一の神あり、神の名を、弁才天女と申す、

○名古屋城の御天守閣の棟瓦の上に、金の鯱あり、其の高さ凡そ一丈、其の重さ凡そ三千斤、

三十七の段

又、ある者、ある時、ある人の家に行きて、酒を飲みけるに、酒の肴、なかりければ、

「何にても、あるものを、取りて、食べよ。」

と言ひければ、

「実に、

如よへ之物

○小一条院御寄附之事

幸ノ年云

嘉祿三年二月廿三日書寫之

後ノ年云

安應二年

後ノ年云

延應二年

後ノ年云

仁治三年

後ノ年云

寛元二年

後ノ年云

寶治二年

後ノ年云

建長二年

後ノ年云

正嘉二年

後ノ年云

正元二年

後ノ年云

文應二年

後ノ年云

弘長二年

後ノ年云

文永二年

後ノ年云

建治二年

後ノ年云

弘安二年

後ノ年云

正應二年

後ノ年云

永仁二年

後ノ年云

正安二年

後ノ年云

乾元二年

後ノ年云

嘉元二年

後ノ年云

徳治二年

後ノ年云

延慶二年

後ノ年云

應長二年

後ノ年云

正和二年

後ノ年云

文保二年

後ノ年云

元應二年

後ノ年云

元亨二年

後ノ年云

正中二年

後ノ年云

嘉暦二年